

体験活動を生かした道徳教育

- 「心のノート」を活用して -

松村 徹¹

学習指導要領に示された、三つの道徳教育改善の基本方針の一つに、「体験活動等を生かした心に響く道徳教育の実施」がある。そこで、生徒の社会体験・自然体験の不足が指摘される中、生徒の心に響く道徳教育という視点を踏まえ、体験活動を生かした中学校における指導について研究を行った。

はじめに

平成14年2月の中央教育審議会答申では、『新しい時代における教養教育の在り方について』の幼・少年期における教養教育の具体的方策の「豊かな人間性の基盤を作る」の中で、「幼・少年期の体験は、その人の人格形成やその後の生き方に大きな影響を与える。学校、家庭、地域社会が一体となって、多様な体験活動の機会を提供するとともに、道徳教育の充実などを通じ、子どもたちに豊かな心をはぐくんでいく必要がある。」と記され、道徳教育や体験活動の重要性について触れている。また、同年7月の中央教育審議会答申『青少年の奉仕活動・体験活動等の推進方策等について』では、「すべての青少年に奉仕・体験活動の機会を与えることが重要だ。」と提起し、総合的な学習の時間など、教育活動全体を通じた体験活動の充実を求めている。

生徒は、日常生活や学校の教育活動の中で、様々な体験をしている。道徳の時間において体験を活用したり、道徳の時間を体験に生かすことにより、道徳的価値の自覚を深め、確かな道徳的実践力を育むことが可能になると考え、本テーマを設定し研究を進めた。

研究の内容と成果

1 「体験活動と道徳の時間の関連図」の作成

体験活動を生かした道徳教育の指導計画を作成するためには、道徳の時間と他の教育活動における豊かな体験活動を明確に関連づけたカリキュラムの開発が必要であると考えた。そこで、道徳の時間の学習指導案の中に、「体験活動と道徳の時間の関連図」（以下関連図と略）と題して構造図の形でまとめた。

さらに、今年度、文部科学省から全児童・生徒に配布された「心のノート」の活用法について研究を進めるため、関連図の中に「心のノート」の活用を位置づ

け、検証を試みた。

2 授業実践

調査研究協力員は、道徳の時間の学習指導案を作成し、「体験活動を生かした道徳教育」の実践を行った。その際、評価に関する取組も行った。調査研究協力員の実践報告については、体験活動と道徳の時間の関連における成果を中心に、以下にそれぞれの関連図とともに、実践事例として報告する。

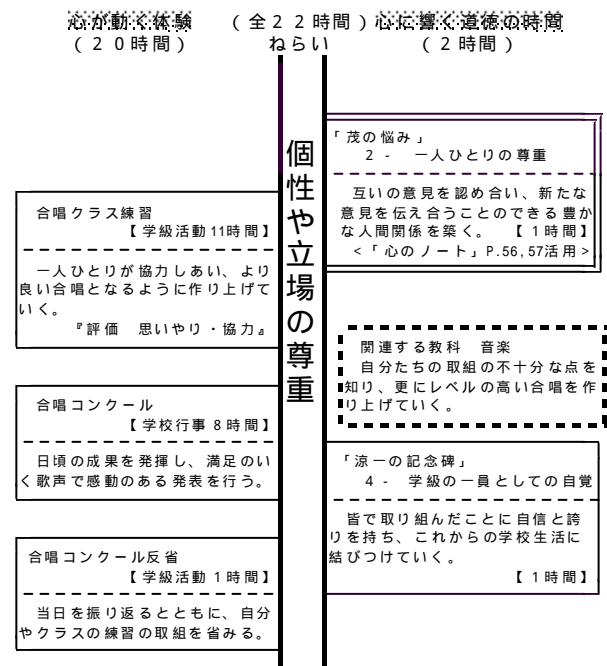
3 実践事例

< 「体験活動と道徳の時間の関連図」の説明 >

- ・ 中心とするねらいを図の中央に表示する。
- ・ 2重線の枠は、調査研究協力員の研究授業を示す。
- ・ 点線の枠は、関連する教科の時間を示す。

(1) 学校行事と道徳・・・2年生の実践

ア 関連図



1 研究開発課 教育専門員

図1

イ 実践を振り返って

本実践は、合唱コンクールの練習を通じて、自分の考えを主張しつつも相手の考えを謙虚に受け止め、良い合唱を作り上げていこうという実践である。練習の過程では、意見や感情のぶつかり合いが生じる場合もある。また、生徒は励ましやアドバイスに、真意をつかめず、「良かれ」と思って発した言葉を批判や非難と解釈することもある。一つの取組を通して、より良いものを築いていくためにはどうしたらいいのか。そこには意見の交換が不可欠である。お互いの意見を認め合い、自ら考え、そして新たに考えを持ち伝えあっていく中で、豊かな人間関係を育てていくことを体験活動を通してねらいとした。そこで、道徳の時間では、人それぞれのものの見方や考え方が多様であることに気づかせ、自分の意見を主張する大切さと、相手の立場を考え謙虚に物事を受け止めることを学んだ。

体験活動と関連づけた指導では、活動の成果を求めるあまり、道徳教育の視点もその結果に求めやすい。しかし、本実践は練習の過程に重点を置き、一人ひとりの立場を尊重して、より良い人間関係を構築することをねらいとしたものとして示唆を与えるものである。

(2) 学校行事と道徳・・・3年生の実践

ア 関連図

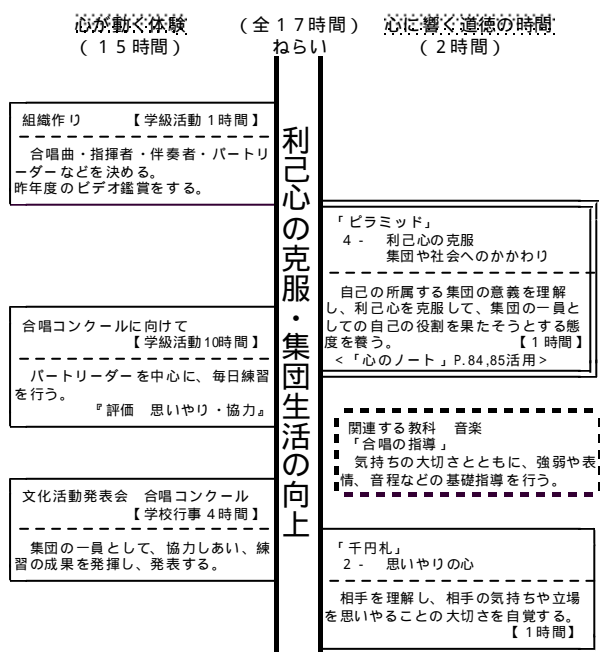


図2

イ 実践を振り返って

本実践も体験活動の中心を合唱コンクールへの取組においているが、ねらいを、自分が学級の一員であることを自覚し、練習や実践を通じて、学級の中での役割を考えさせることとした。また、学級全体の協力がなければ合唱は完成しないということから、「利己心

の克服」と今後の「集団生活の向上」を求めた取組を行った。

合唱の技術的な指導は、音楽の授業を中心としているが、生徒個々の気持ちを前向きにさせたり、集団の良い雰囲気づくりに、体験活動と道徳の時間を関連づけた指導は大変効果的であった。一つの行事について、様々な角度から考えさせ、学習させることは、合唱の完成だけでなく、学級の一人ひとりの生徒に焦点をあて、生かしていくためにとても大切なことであることを実感させる取組であった。

(3) 総合的な学習の時間と道徳・・・2年生の実践

ア 関連図

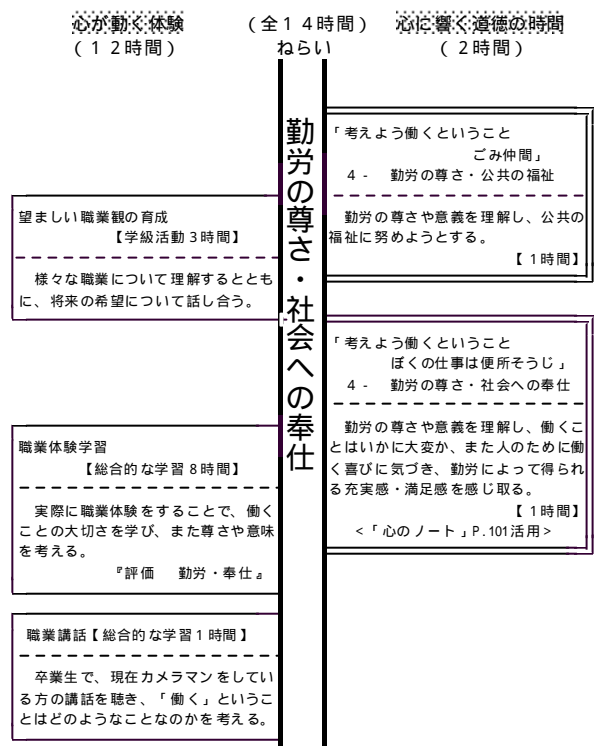


図3

イ 実践を振り返って

体験活動は、総合的な学習の時間における職業体験学習を中心とした。中学生の時期は、汗して働いたという経験が少なく、そのため、働くことの大変さ、楽しさ、働いて感謝される喜びなどを感じる場面に接したことがある生徒は少ないであろう。そこで職業体験学習を通じて、自分の受け持った仕事の社会的意義に気づき、努力する態度を育てること、また、社会生活の発展や向上に貢献する気持ちを持つことが求められている。

道徳の時間で、生徒は仕事の大変さ、労働の喜びを考え、学ぶことはできたが、その後の実体験によって、それを現実のものとして感じるようになった。そういった意味で、体験活動前の道徳の時間は、勤労の意義や大切さを前もってイメージするのに貴重な時間とな

った。

道徳の時間後の感想の中には、労働に対する前向きな考えが多かった。この道徳の時間が、職業体験学習を行う上で意識の高まりとなり、積極的に体験に取り組む原動力になったといえる。そして、体験を経て、改めて仕事の大変さ、楽しさを体得するに至ったのである。

(4) 総合的な学習の時間と道徳・・・3年生の実践
ア 関連図

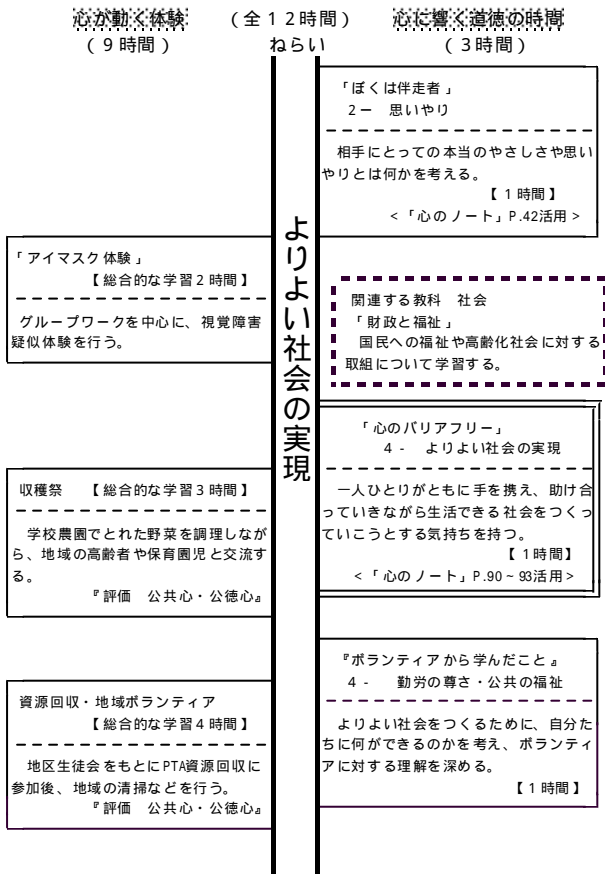


図4

イ 実践を振り返って

体験活動は、福祉をテーマとした総合的な学習の時間の取組を中心としている。「アイマスク体験」では、疑似体験を通して障害者の立場になってものを考えることに重点を置き、道徳の時間では障害者に対してどのように接していくかを健常者からの視点で考えるようにした。資料は、教材化されている乙武洋匡氏の「五体不満足」を用い、人間どうしのつきあい方として「障害者だから特別にということはない」という著者の思いや考えを生徒に受け止めさせた。しかし、障害者の全てが著者のような考えをしているわけではなく、割り切れない思いをしている人も実際には多く、よりよい社会の実現に向けて配慮と接し方をより一層生徒に考えさせたい。

1 「心のノート」の活用について

「心のノート」は、教育活動全体を通じて行われる道徳教育の充実を図るために用いる教材であるが、道徳の時間では、その一部で補助的に活用することが求められている。そこで、調査研究協力員は道徳の時間の導入や終末での活用を中心に実践を展開した。

導入では、写真を活用し、とかく「硬く」なりがちな道徳の時間の流れを「リラックス」させたものにするように工夫された実践が見られた。加えて、写真に載っている活動が自分たちの活動と重なり合うため、興味を持って授業に取り組んでいたようであった。

また、事前に「集団における自分の役割」を書かせ導入に用いた例では、生徒の考えを教師が事前に把握した上で授業を行うことができた。それにより、生徒も終末に自分の考えの変わった点などの振り返りに活用できた。

別の例では、終末において「心のノート」を教師の説話の一部として、書かせずに活用した実践があった。この授業では、自己の振り返りとして、道徳的価値を生徒に押しつけることなく余韻を持って終わらせることに成功した。ノートであるので、「書く」ことが基本となるが、授業の展開や生徒の実態に応じた多様な使用法として、示唆を与えるものである。

「心のノート」の活用において、重要視されていることの一つに、「学校と家庭・地域との連携を図るための活用」がある。調査研究協力員は、職業体験学習を控えた道徳の時間で、生徒にあらかじめ家族やまわりの大人から『働く喜び』について取材させておいたものを活用した。これを行ったことにより、少なくとも『働く』ということについて、家庭で会話がもたれ、職業観・仕事に対する思いなどを子どもと考えたり、話したりする場面があったということは大きな成果である。現在の社会は少子化・核家族化に伴う人間関係の希薄化などにより、家庭や地域の教育力の低下も危惧されている。人間として生きていく上で大切にすべき内容について、学校と家庭が共通理解を図り心の教育に関心を持っていくことはきわめて重要だと考える。また、この実践により、教師も家庭の考えを知ることができ、「心のノート」を介してより両者が身近に感じられたのである。

その他、「心のノート」の活用について、簡潔にまとめてみる。

・「心のノート」は道徳の一つの内容項目が4頁にまとめられており、「メッセージから学ぶ」「自分を見つめる」「実際に行って考える」といった構成を通して、自らの体験に基づいて書くことが多い。

「体験活動を生かした道徳教育」と関連して用いることによって、より活用が図れる。

- ・ノートの構成が3学年で1冊(小学校では2学年で1冊)になっているので、その時に書いた内容を次年度見ることにより、自分の心境の変化や成長を振り返ることができる。
- ・「書く」という行為により、発表が苦手な生徒も自分の考えを明確にし、整理することができる。

2 評価について

今回の学習指導要領の改訂に伴い、指導要録も新しい形式となった。その中の「行動の記録」の評価項目も変更された。

「行動の記録」は、学校における子どもの行動や態度に表れた成果を評価する。そして、この評価は現行の道徳教育の指導内容と特に関連が深い。「行動の記録」の評価は、すべての教育活動を通じて行われるが、今回の実践では、体験活動の際の評価を中心に行った。

具体的には、関連図の中に、評価場面の中心となる体験活動に評価項目を設定し(実践事例の関連図参照)、また学習指導案の中に評価の観点を明記した。評価方法として、体験活動の場面で観察法を実施した。併せて、今回の体験活動を生かした道徳教育の実践の事前・事後に質問紙を用いて、アンケート調査も実施した。一例をあげる。

< 3 実践事例(3)より >

- ・評価項目 「勤労・奉仕」
- ・評価の観点 勤労の尊さや意義を理解して積極的に職業体験学習に取り組もうとしている。
- ・アンケート調査項目
 - Q1 『働く』ことは大切なことだと思いますか?
 - Q2 『働く』と聞いて連想することは何ですか?
 - Q3～Q5(略)

事前アンケートの、「『働く』ことは大切なことだと思いますか?」という問いに対して、「思わない。働く以外に大切なことはたくさんある。」と答えた生徒がいた。しかし、職業体験学習後のアンケートでは同じ質問に対し、「大事。大切なことは他にもあるが、『労働』は、一生において重要なこと。」と答えていた。また、「『働く』と聞いて連想すること」という問いに対しては、事前では、「労働・失業」と答えていたが、体験学習後では「労働・給料・家族との生活」と変化していた。

この生徒は、実際に大手旅行代理店を訪問して、職業体験を行ったが、大変まじめに一生懸命に仕事に取り組んでいた。また、働くことにマイナス思考だったものが、やはり働くことは大切なことであり、家族との生活を成り立たせているものだと、考え方がプラスの思考に変化してきたということなどから、「勤労・奉仕」に一定の評価を与えてよいのではないかと。

「行動の記録」は、生徒の行動面に表れたことの評価が中心であるが、評価の場面や観点を明らかにし、

生徒の考え方を知るために、今回のようなアンケート調査を加え、心の変容を見取することは、その評価の幅を広げるものである。

しかし、「行動の記録」の評価をこの体験活動を通してのみ評価することは、一面的である。日頃の清掃活動を観察するなど、継続的に評価を重ねていくことが重要である。そのためには、観察ノートのようなものを用意し、気づいたことを記入していくといったことも有効である。

今後の課題

今回の実践では、学校教育における体験活動を取り上げたが、「はじめに」の中央教育審議会答申にもあるように、今後は学校、家庭、地域社会が一体となって、多様な体験活動の機会を提供する必要がある。

生徒が興味・関心を引きつけられるものに、自分たちの住む地域社会を素材とした体験活動や、地域の人々の話を聞く道徳の時間の展開が考えられる。こうした教材の発掘や活用のためには、地域の人や保護者の協力が必要である。ともに道徳教育を考え、その充実を図るために、今後は、体験活動も含めた家庭・地域社会と連携した研究をさらに進めていきたい。

[調査研究協力員]

茅ヶ崎市立萩園中学校	松下文彦
座間市立栗原中学校	田附和枝
秦野市立北中学校	小瀬村浩
大井町立湘光中学校	石井正二郎

[教育指導員]

長沼忠吉

[長期研修員]

海老名市立柏ヶ谷中学校 戸引一博

引用文献

- 文部科学省 中央教育審議会答申 2002「新しい時代における教養教育の在り方について」
 文部科学省 中央教育審議会答申 2002「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」

参考文献

- 押谷 由夫 「『行動の記録』の趣旨と改訂のねらい」(「指導と評価」2001年3月号)図書文化
 神奈川県立総合教育センター 研究集録第21集(平成13年度)
 七条 正典編著 2000「改訂 中学校学習指導要領の展開 道徳編」明治図書
 新宮 弘識 「『心のノート』によって道徳教育はどのように充実するか」(「教職研修」2002年8月号)教育開発研究所
 文部科学省 2002「心のノート 活用のために」

